1994年

緑区民の
戦時体験記録集（第一集）

第六回戦争体験を語り継ぐ集い・資料

目次

発行にむけて

▽戦時体験記（1）△

戦争末期の国土防衛軍・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（花房達夫）・・・3

戦闘中負傷現認書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（橋詰四郎）・・・8

我が工兵隊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（牧圭以）・・・12

兄の出征そして玉砕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川島照男）・・・18

私の体験、東京大空襲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川島照男）・・・19

戦時下の衣食住・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川島照男）・・・21

戦死者、戦没者の碑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（川島照男）・・・23

船舶砲兵第一連隊（暁第二九五三部隊）教育隊・・・・・・・・・・・・（梅田進）・・・24

▽第5回（一九九三年）「戦争体験を語り継ぐ集い」感想から△

すいとんづくりに参加して思ったこと・・・・・・・・・・・・・・・・（磯明子）・・・28

すいとん作り・銃後の生活に想う・・・・・・・・・・・・・・・・・・（今村定子）・・・29

すいとん作りで思うこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（奥井勳）・・・30

▽戦時体験記（2）△

戦争体験を語り継ぐ集いに寄せて・・・・・・・・・・・・・・・・・・（山野寛）・・・32

終戦の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（木村正男）・・・38

発行にむけて

子どもたちに五十年前の戦争のときのようすを伝えていく節目（ふしめ）が、今年来ているように想います。敗戦の年に亡くなられた方々の五十回忌を迎える時だからでもあります。

また、戦争体験を語り継ぐことの重要性・緊急性が語られはじめて久しくなりましたが、年を追うごとに体験者が高齢になられ、また亡くなられる方も増える中で、「急がなければ」という想いが年々つのるばかりです。そうした想いからも、今年の「戦争体験を語り継ぐ集い」では、後々にまで残すこの「体験記録集」づくりに取り組みました。

この「体験記録集」では、直接の戦闘体験、戦時体験を柱としながら、昨年の「戦争体験を語り継ぐ集い」に参加してくださった方の感想・回想も掲載しております。なにぶん初めての取り組みなので、地域に暮らしてみえる方々の

戦時体験の一端しか集めることができませんでしたが、特に「銃後の体験」を含めてより多くの「体験記録集」が積み重ねられていくことを願って止みません。

最後になりましたが、「体験記録」は、子どもたちに伝えたいという強い想いを持ちながらも、内容の性質から子どもたち一人ひとりでは読みこなすことが難しいものになってしまいました。この「体験記録集」を子どもたちが持ち帰ったご家庭で、おとうさんやおかあさん、そしておじいちゃんやおばあちゃんが子どもたちを囲んで「読み聞かせ」ていただき、そこから話しがふくらんでそのご家庭なりの「戦争体験を語り継ぐ集い」が催されることを、実行委員一同こころより願っております。

第六回「戦争体験を語り継ぐ集い」実行委員会一同

戦争末期の国土防衛軍

花房　達夫

昭和十八年十二月二十五日、半年繰り上げ卒業で現役兵として本籍地岡山の歩兵部隊へ入営。入営後、南方ラバウルへ派遣されることを知った。然し輸送船のやりくりがつかず、五月留守部隊要員となる。私より後に入営し、戦地へ送られ、戦死した人のことを考えると運が良かったと思うより、この年まで生きていることが申し訳なく思うことがある。二年足らずの軍隊生活の末期は、昭和二十年四月から復員する九月まで宮崎県高鍋町で第一線部隊の分隊長として、自分の墓場となる筈の陣地構築に従事していた。

その間の末期症状的軍隊の出来事を断片的に述べたい。

一、戦後、国土防衛軍は銃、銃剣のない老兵が多く、飯ごう水筒は代用品を使用していたと云われているが、確かに編成が遅い部隊ほど老兵が多く、兵器・装具が不足していたことは事実である。私たちの部隊は早く編成されたので、兵器、装具は優秀で、兵士は現役・予備役がほとんどであった。軍隊は早いもの勝ちの社会である。

二、七月になってもまだ陣地は半分もできていない。その頃、突然「緊急戦備」が発令された。米軍の敵前上陸間近しの警報である。今までの横穴式陣地の構築を一時中断。急きょ竪穴式掩体壕（えんたいごう）に切り替え、弾薬は中隊保管となった。いよいよ戦闘かと覚悟した。

一番危険な水際陣地へ配備されたN分隊長は激越な口調で我々に、この不当な配備を涙ながらに非難した。

三、S一等兵は噂によると、岡山市のやくざで、土建業者だそうだ。我々は小隊長以下、谷間の掘立小屋に居住していたがS一等兵はいない。実は、彼は近くの民家を借りて営外居住だった（営外居住は中隊長以上）。なぜそうなったのか我々下級兵士には分からなかった。

彼はそこで一人の若い娘と同棲していた。一体、日本軍隊の厳しい規律は

どうなったんだろうと内心大いに憤慨したものである。

岡山の部隊にいたとき、東大経済学部出身の戦友Tが私に「この戦争は日本の負けだ」とささやいた。「俺もどうも負けるのではないかという気はするが、お前はどうして確信できるのだ」と反問した。彼は「大学のゼミで日米の経済力を比較検討した結果の結論だ」と。

私はその言葉を思い出し、更に上記のような軍規の乱れ、見聞した下級将校の無気力・卑劣な行為、弾薬補給の見通しゼロ、資材の不足、劣悪な給与等を考え合わせ、これでは到底勝ち目はないと確信した。

S一等兵は後日、一週間休暇を貰って岡山へ帰り、不足していたスコップ、つるはしを二百丁程調達してきたが、私はつくづく軍の権威は地に落ちたナーと感じた。

四、米軍機は軍事施設破壊、大都市、中小都市の盲爆、最後は交通機関の破壊へと進んでいた。戦後判明したことだが日向灘は米軍の上陸地点になってい

た。米軍機は朝八時頃から夕刻六時頃まで絶えず上空を飛んでいた。

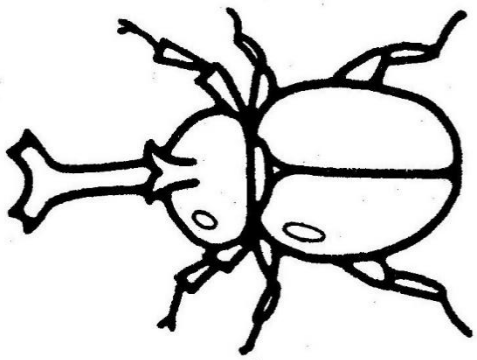
どこかを爆撃した帰りにエンジンを止め、超低空で地面を這うように飛来し、海に出る手前でエンジンをフルにかけ、人がいようがいまいがお構いなしに銃撃して海上へ飛び去る。まるでハンターが狩猟ゲームを楽しんでいるようだった。そのため我々の行動は夜間に限られるようになった。

五、山中ゆえラジオはない。八月十五日の敗戦は連隊本部へ命令受領に出かけた准尉から夕刻聞いた。極く少数の悲憤こう慨の声はあったが、大勢は口には出さなかったものの、ほっとした気持ちだったと思う。その後は日本の将来よりも、我々はどうなるのだろうかという不安が強かった。捕虜になることは間違いない。噂で日本兵の捕虜虐待は聞いて知っていただけに、捕虜になれば虐待される、殺されるという不安が大きかったのだ。兵士たちの間には日増しに早期復員の声が高まった。

六、戦争が終り、平和を実感できたのは翌十六日の夜、山頂から見た光景であ

る。水平線上に端から端まで見事に並んだ漁船の漁り火（いさりび）。この漁り火こそ平和のシンボルなのだと、その光景が今でも私の脳裏から消えず、はっきり記憶されている。

九月下旬、敗軍の兵士たちはまとまって貨物列車に揺られて囚山へ。焼土と化した市街地を眺め、プラットホームで解散、懐かしい郷里へ急いだ。

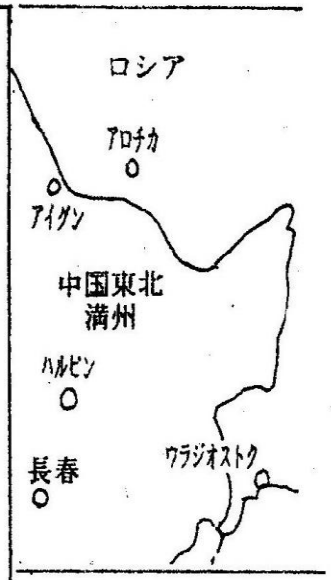


戦闘中負傷現認書

負傷者　荒木　貞夫
本籍地　京都市西京区松尾万石町５６番地
現住所　大阪市茨木市田中町３番９号
元所属部隊　関東軍第六国境守備隊歩兵１０中隊１班
当時直属上官
関東軍司令長官　陸軍大将　山田　乙三
独立混成第１３５旅団長　陸軍少将　浜田十之助
不朽第３７５６２参謀　陸軍少佐　須賀　正美
独立歩兵第７９７大隊長　陸軍大尉　千葉　徳明
歩兵第１０中隊長　陸軍中尉　佐久間右門
第１０中隊第１班長　陸軍軍曹　竹田　岩夫
負傷状況
発生年月日　昭和２０年８月９日
発生場所　満州黒河省愛琿（アイグン）朝水東山陣地
状況　ソ連軍戦車と歯の立たぬ死闘中
負傷個所　右眼外傷強膜裂傷及び右上腕盲管銃創
処置方法　眼は硼酸で洗っただけ、腕はリバノール液を塗っただけ。戦闘中で衛生兵携帯薬品以外の処置は不可能であった。
武装解除　昭和２０年８月２１日
入ソ　昭和２０年９月１５日

……

上記現認す　昭和６２年１月１日
現認者　橋詰　四郎　印
本籍地　豊明市間米町鶴根１２１１－１６番地
現住所　本籍地と同じ
元所属部隊　関東軍第六国境守備隊歩兵１０中隊１班
以上相違ありません。現認者　橋詰四郎　以下余白。



盲管銃創
弾が体を貫通せずに
体内に止まったこと

戦闘中負傷現認書

橋詰　四郎

この「負傷現認書」は、正月の支度をしていた昭和六十一年十二月三十一日、郵便書留速達便で届きました。

荒木はシベリアのアロチカ炭鉱で強制労働をさせられ、昭和二十四年生還してきて、医師の診断書を添えて、傷病軍人の申請をしましたが、「事実を証明する人」が必要と断わられ、三十八年間私（橋詰）を捜し、「証人」を依頼し、再申請しましたがなぜか却下されたままです。

今回の「戦争体験を語り継ぐ集い」に、消える言葉でなく残る文字で、氏名はもちろん、住所も発表したいと頼んで、了解を得ました。電話で話したのは六月の中旬入梅の真っ最中。毎年今ごろは「敵弾」が暴れると、元気の無い声でした。私は思う。荒木が死んで火葬の後、子どもや孫が竹と木の箸で骨を拾うとき、鉄の固まり「敵弾」をどの様な気持ちで拾うのだろうかと。長い間、天気の悪いとき苦しめてきた「敵弾」そして日本の国も認めてくれなかったことを。子どもや孫までも悲しいこと、これが戦争です。

私も、シベリアのクラスノヤルスクで強制労働を強要され、私は引揚者でない、「生還者」だと言っています。

ナチスがユダヤ人を大量に虐殺したことは皆さんも知っている通りです。戦争が終わって、ユダヤ人はこれで殺されなくなったと喜びます。本当に心から喜びます。

シベリアへ強制連行された日本人は、戦争が終わってから、平和になってから、ソ連軍の銃口に狙われながら、酷寒、飢餓、重労働、疫病の中で、二年から十年「死の重労働」をさせられ、六万とも七万とも云う日本人が死んでいるのです。平和になってからでも死ぬのが戦争です。ですから、戦争をしないように皆で心掛けて下さい。

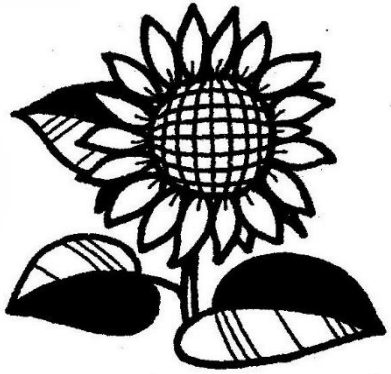
今年の五月二十七日私は舞鶴にいました。シベリアから生還した人達が祖国

への第一歩を踏んだ桟橋が復元したからです。募金活動で二千六百万円集め完成しました。

その時「私のお父さんはシベリアの何処で、どのような死に方をして、何処に埋められているのですか？教えて下さい。」と、言う人が二人もいました。

平和な日本で、まだまだ戦争を引きずって生きている人が大勢います。

戦争、子どもと一緒に考えて下されば嬉しいです。



我が工兵隊

牧　圭以

一、流れも清き豊川や、一望果てなき高師原
古き名に負う吉田こそ、我が誇りなる豊橋の
土地高燥の向山、見るも床しきとびの色　いざや称えん我が兵科

二、水とうとうの豊川や　ちゅう流渦巻く天竜に
鍛え鍛えし我が腕（かいな）、ろ・さおを執ればたちまちに
竜神為めにへき易す、聞かずや面かじ取りかじの　しったの声も勇ましく

三、草木もなびく炎天下、焼きつく河原踏みしめて
玉なす汗も物かわと、号令一下一斉に
百難冒して架橋する、知らずや健児の意気高く　天竜珂畔の絶叫を

四、本宮おろし肌を刺す、骨も凍らん厳冬に
十字を高く振りかざし、円匙（えんぴ）を執ればたちまちに

熱血あふれ肉躍る、黙して我れに力あり　見よ築城の進化をば

五、百雷一時に落つるごと、耳をつんざく爆音に
水煙万丈天を衝く、咬竜（こうりゅう）むさぼり雲を呼ぶ
宇宙の万端ことごとく、戦き震えて声もなし　ああ壮烈の爆破かな

六、架橋、築城はた爆破、朝な夕なに鍛えたる
隆隆なびく鉄の腕、腕（かいな）を試すは何時なるぞ
風雲東に兆す時、我等の責務はいや重し　いざや励まんもろともに

これは工兵第三大隊（後に連隊）の軍歌である。同隊は、昭和の初期約二十年間豊橋・向山に駐屯した特科部隊で、現在の陸上自衛隊の作業隊に当たる任務を帯び、電信隊、鉄道連隊、船舶工兵隊等に中で拡大され、前線と後方を問わず対敵行動する技術部隊である。

私は満二十歳に達した時、徴兵検査に合格して、翌年図らずも工兵隊に徴収

され、豊橋の工兵第三大隊に入営を命ぜられたので、この軍歌は懐かしい。明治生まれの私は、少年時代から「教育に関する勅語」と「軍人に賜った勅諭」によって徹底的に教育洗脳され、国民と共に帝国主義、皇軍意識を注入されたので、軍隊生活は最高の名誉で、無上の優越感を覚えた。そして軍歌「我が工兵隊」は歌う毎に士気高揚し意気軒こうたらしめた。侵略戦争などは夢にもなく、一旦緩急あれば義勇公に報じ、国体危機に至れば干か（かんか）を執って敵を懲らす気概に燃えていた。政治家の思惑などには微塵も乗せられない忠良な天皇の赤子（せきし）であった。

昭和十九（一九四四）年五月臨時召集により千葉県柏の召集担任部隊に応召した私は、仮編成のまま比島派遣軍独立混成第三十旅団（後に第百師団）工兵隊要員としてミンダナオ島ダバオに向け出陣した。フィリッピンは昭和十六（１９４１）年十二月八日のハワイ沖開戦と相待って、バタン・コレヒドール攻略にはじまり、戦果を上げた進攻作戦に次いで占領地治安のかん定作戦までは

順調であったが、戦局不利になってしょう号作戦発動のころには、総力を挙げての国家総動員にもかかわらず、物心両面の劣勢によってついに敗戦の止むなきに至った。皇軍の誉与は微塵にひしがれたのである。

かつては天下無敵を誇った皇軍も、飛行機のない航空隊、軍艦のない海軍、車両・軍馬のない、し重兵、砲弾のない砲兵等、その機能を失った日本軍は、ただ将兵の精神力のみに頼らざるを得なかったが、腹が減っては戦は出来ないの例え、健全な身体でなければ健全な精神は望めない。「軍人精神」は空念仏に帰した。

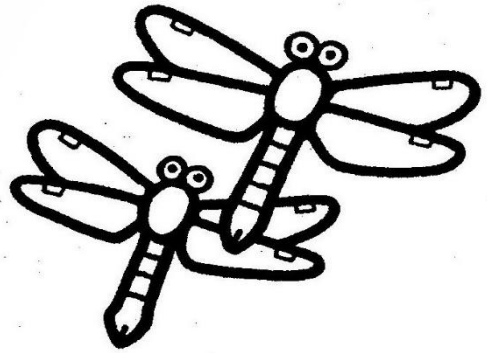
海上封鎖により軍需物資の補給が困難となり、自給自足に頼らざるを得なくなった海外派遣部隊の将兵は、作戦と共に現地住民の協力援助によって難局打開をはかったが、米軍の逆上陸によって全島が戦場化したのちは、農地を捨てて山中に逃げた原住民や在留邦人の農作物を無償で徴用し、果ては味方同士で奪い合いをするなど同族相食む餓鬼道に陥った。武器による敵味方の殺傷が、

ついに食糧難による死活に追い込まれ、弱肉強食の畜生道に陥った。そこには一片の軍紀もない。

野戦病院解散によって見捨てられた患者はここかしこにうずくまって露命をつなぎ死を待つばかり。それを横に見ながら戦友は自分一人の保身に精一杯で看護の余裕もない。戦死と餓死と二つが迫っていた。貴重品である時計、万年筆、紙幣のほか、写真機、双眼鏡、ミシンなどの遺留品が散乱していても誰一人振り向きもしない。自棄的な兵が軍票の札束を燃やして湯をわかしていたのも戦場の一駒であった。

怨敵退散、鬼畜追放の護摩をたき、日軍勝利・皇運無窮の祝詞を唱えて神仏の加護を求めた僧職・神官、朝夕戦勝祈願を続けた銃後の国民、出征軍人に贈ろうと敵弾除けの千人針に願いを込めた老若の婦女、寄書きをした日の丸の旗をたすきにした応古兵、縁起を担いだ神符のお守りを最期まで肌身離さず持ち続けた戦没者・・・すべてが大本営の偽装報道に惑わされて敗戦に引き込まれ

た。そして大元帥統率の下に動員された陸海軍将兵は、いささかの疑問もさしはさまず八紘一宇（はっこういちう）の聖戦に参加したのであるが、それは結局、悪魔のわなにはめられた哀れな人間であった。死んで軍神に祭られるという靖国神社は、あめとむちの両面を持った大日本帝国のおとりであった。



兄の出征そして玉砕

川島　照男

昭和十九年春、名古屋城門前は、入隊する本人とその家族の人達で混雑していた。私の家族も、兄を囲んでその中にいた。

父は押し黙ったままである。母は「病気をせんようになあ」と、普段と変わらぬ顔つきと声で兄に言った。私は当時、逓信省の給付生で東京の学校に入学していた。「兄出征帰れ」の電報で夜行列車で名古屋へ着き、城門前で待った。兄と会った一瞬、兄はにこっとしたが、すぐ真顔になって私に「体に気を付けてな。」私は「必ずかえってきてよ。」と言うのがお互いに精一杯だった。

まもなく集合の号令がかかった。その時父は兄に何か一言言った。兄はうなづいていた。兄は隊列を組んで消えて行った。母の顔から涙が流れていた。

戦況はテニヤン島、サイパン島が適の手に落ち、空襲が多くなってきていた。昭和十九年九月父から「兄が戦死し合同葬がある帰れ」の速達便が来た。戦

死広報は「サイパン島にて戦死」だった。
父からの手紙を読んで、名古屋城門前で別れたときの兄の顔が頭をよぎった。人生二十五年の最後をサイパン島の地に散った。私の手紙を読んでいる顔色が変わったのか、涙が落ちたのかわからないが、同室の級友たちは皆、いつの間にかいなくなっていた。

私の体験、東京大空襲

川島　照男

私の学校は、学徒動員動員により、東京深川の旅館に分宿して、藤倉電線で二交代作業をしていた。
当夜、私は夜勤で作業を始めてから三時間も過ぎた頃、いきなり空襲警報のサイレンが鳴った。操業は停止されて、各職場ごとに地下室に待避していたが、外の様子はわからない。突然一言、「逃げろ」の連絡員の声で先を争って地下室から出た。もう工場は火の海だ。かろうじて道路へ出て、周知されていた集合場所へ走った。両側の工場も燃えていた。道路がコンクリート舗装だから走ることが出来て助かった。運河にかかる木橋を通らねばならなかったが、すでに半分は焼け落ちていた。とにかく熱い。職場長の「川へ飛び込め」の声で、私は筏の側をめがけて飛び込み、筏にしがみついて回りを見たら、大勢の人が筏につかまっており、熱いので頭を水に沈めては火災の消えるのを待った。暫くして、近くの高射砲陣地の弾薬庫が爆発し、頭の上をうなりを上げて破片が飛んで行く。東の空が明るくなり始めた頃、火災も弾薬庫の爆発もおさまり出したので、道路へはい上がった。点々と人が倒れているのが見え、若い女の人が狂気のように子どもさんを捜していたのを、今も覚えている。
宿舎の旅館も燃えてしまったので、教科書もふとんも全部燃え、身一つになり、東京駅から国電で学校へたどり着いた。

戦時下の衣食住

川島　照男

綿、絹等の生産も輸入も少なくなり、統制経済となり、多品種の衣類を生産することは能率も悪いので、男子は軍服に似た国民服に制定された。

女の方は、ほとんどがモンペ姿になったが、制定されたものかどうかは知らない。皆さんは昔着ていた着物や手のまだ通してない着物をほどいて作っておられたように思う。

外出するときは、雑のうを肩からかけ、中に一食分くらいの食糧、預貯金通帳等、大切な物と自分の住所、氏名、連絡先等を入れ、持ち歩いた。衣料も切符制度になり、一定の量しか買えないので、昔の古衣料も大切に着たものだ。

食糧も最後には配給制になり、昭和二十年になると、極度に食糧不足になっていた。特に都会の人々は毎日の食糧を確保するため、お米に大根や、ひえ、あわ、豆粕等々と一緒に炊き込んで食べたり、また雑炊、すいとん等工夫していた。

都会では食料を確保するために、庭や空き地を耕して、じゃがいもやさつまいも、野菜等を作って、質はともかく量を増やすのに懸命であった。

どの家庭でも、電灯の光を外へ漏らすことは、灯火管制下において固く禁じられ、黒い布きれで作った暗幕が何時も取り付けられたままだった。

窓ガラスは爆風が当たっても飛び散らないよう細く切った紙が縦横に張っていた。

町の要所にはコンクリートで作った水槽が置かれて火災の発生の時すぐ消し止めることが出来るように準備していた。

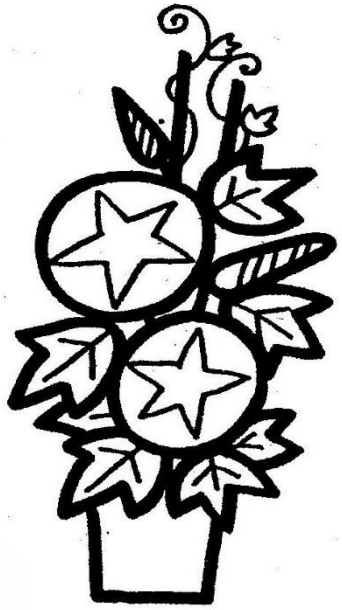
生活用品も、金属製品は皆、供出していた。鉄等金属の不足により、代用品時代になり、セメント、ガラス、木材、セルロイド等の代用品を使っていた。

戦死者、戦没者の碑

川島　照男

昭和五十九年の秋、鳴海小学校から移築された、各事変、戦争で戦死された方々の碑と民間人の方でＢ２９の爆撃等でお亡くなりになった方々の碑が、成海神社の一隅に安置されています。

成海神社に行かれる機会のありました時には、戦死者、戦没者の名前も彫ってありますので見て下さい。



船舶砲兵第一連隊（暁第二九五三部隊）教育隊

梅田　進

昭和二十年八月六日、初年兵三十名の実弾射撃訓練のため、向洋陣地を朝六時頃出発、国鉄向洋より広島駅に向かう途中空襲警報等により７時過ぎに到着、市内電車で江波に行く途中土橋で乗り換え、七時三十分頃江波に着く。目的地の三菱電気の工場に向かって行進中、一時小休止する。突然班長殿「飛行機！」と叫ぶので、上空を見るとＢ２９が見え、また偵察飛行かと思ったが、落下傘らしき物が落ちて来るのを発見した瞬間、ピカ！ドン！と閃光（写真のフラッシュのよう）を受け、左顔面に火傷を受けると同時に爆風が起こり、その場に全員鉄兜をかぶり、風上の方に伏せ、暫く静止し、爆風の去るのを待った。一段落後、全員集合点呼をとり、近くの総合運動場の部隊本部に駆け込む。再点呼で所持品を点検すると、雑のうのひもが大半切れていた。

私は左顔面火傷を受けたが、薬がなく、とりあえず自分の小便にて顔を洗う。

兵隊の方は、頭髪下部部分が焼けていた。そのうちに一般人が場内に崩れ込んで来た。中には裂傷した人や、左腕切断し母親に抱かれている女の子、火傷の薬と叫び衛生兵に群がり、処置に困らせる人もおり、兵舎内には横たわっている人が数知れず、中に一人正装姿ですでに死亡していた。屋外で三十歳前後の婦人が、左大腿部中程に十三センチ位の裂傷を負っており、産婦人科の先生が治療中で動くので私と兵隊二人に腕をにぎらせ、オキシフール、ヨードチンキを塗り、後はガーゼだけで済ませた。その時の婦人の力の強いこと、腕の骨がつぶれそうな思い出がある。その前に会った四、五歳の女の子の母親は、自分の衣類をちぎっては傷口に当てがっていたが、治療の施しようがなく、間もなくおそらく出血多量で死亡した。十五時頃命令により比治山下で、警備一般人の負傷者の救護に当たるよう指示があり、私と兵隊全員で総合運動場を後に徒歩で相生橋を渡り、比治山下に着く途中、焼死者負傷者等を目の当たりに見たのだが、その悲惨な有様は今でも忘れられない。二班に分かれて負傷者の収容

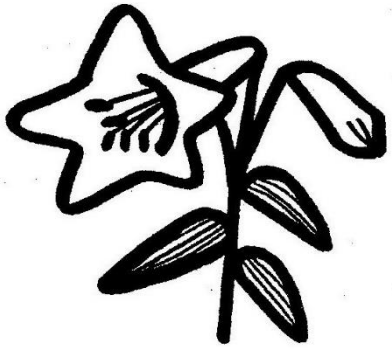
にとりかかり、一カ所に十五名から二十名位集合させ、住所、氏名、年齢その他記録する。火傷者は「水！水！」と叫んでいる。水をやれば死ぬかも知れないし、その判断に困った。六年生の男子は、殺してくれと私の銃剣を引き抜こうとした。これは危ないと思い、兵隊には紐で固定するように指示をする。夜になって月明りの中で、女性の毛髪が乱れ、頭の怪我で血が顔に流れ、それは恐ろしい形相だった。

翌八月七日、朝になって男の子がいないので捜しに出てみると、石油箱にわっぱを付け、女の人の引く箱に乗っておりびっくり。実はお母さんとばったり再会したそうだった。

兵隊の食べ物は、比治山上にある司令部より支給されていた。悪臭のため鼻に詰め物をしたが、言葉がはっきりわからないのでやめた。今日もまた負傷者救護。昼ごろから死体の収容作業に掛かり、交番所より検案書（男女別、年齢、住所等記入）を支給されたが、全部で六十五～七十枚あった。

たまたま死体収容所の橋に、四、五歳ぐらいの女の子の衣類が若干付いていたのだが、道路端から降りてきた女の人が「私の子どもです！」と泣きながら、死体にすがりついたので、事情を聞いた。「衣類でわかりましたが、どうして分かれたのかわかりません。ダビには自分の手で…。」と言うので、他の者とは別にダビに付した。死体も積み重なっているのでなかなか焼けずに困った。呉市からの応援の人の話で、呉市は爆弾のため人はバラバラになっていることを知った。

八月八日、前日と同じ作業で十五時頃応援の人に引継ぎ、向洋陣地に帰り、状況報告を終わり、内務班に戻る。



すいとんづくりに参加して思ったこと

磯　明子

八月八日（日）緑社教センターで開かれた「戦争を語り継ぐ集い」で「すいとん」を作るお手伝いをさせて頂きました。

地域の先輩の御指導のもとに大鍋四杯のすいとんを作りました。戦争を知らない世代が多くなる中で戦争の恐ろしさを語りついでゆくことは、なかなか大変なことだと思います。私自身、母の手にしっかりつかまって焼夷弾（しょういだん）の火の粉の中をにげまわった幼い日の記憶は、遠い過去のものとなってしまいました。あの頃は、いつもお腹を空かせていましたっけ。大きく膨らんだお米の粒がチラッと浮かんでいるだけのお粥（かゆ）、すいとんはお汁ばかりで中味はほんの申し訳程度しか入っていませんでした。少しでも食糧の足しにと庭先に育てた南瓜は花もつるも食べましたし、種もおやつになりました。乏しい配給の食糧しか手に入らなかった都会暮しの中で、必死に子供を育てた

母の苦労が思われ、久しぶりに頂くすいとんの湯気が目にしみました。
出汁を取った後の煮干しまで上手に利用して味付けをして下さったのを頂きながら、昔の思い出も一緒にかみしめたひとときでした。

すいとん作り・銃後の生活に想う

今村　定子

私達、折にふれ思い出されます。銃後を守る主婦として子供を育て生きぬくことは大へんなことでした。栄養失調で亡くなる子も多く有りました。
とにかく食べられる物は何んでも食べました。タンポポ、セリ、南瓜のツル。お米は配給で一日一人二合当りで、生の大根、芋等入れて量を増やして食べ、また小麦を引いた皮（フスマといった）おしつぶした生の大豆等、さつま芋の生で干して粉したむし団子など最高のおやつでした。あれこれ好き嫌いと云える物はなし、小言、不満など言葉すら忘れられて居た時代でした。
この度、あらためてすいとんを食べる会に参加、お手伝いさせて頂き、感懐深いものが有ります。
あの頃のすいとんもこんなにおいしかったかと、今さらながら涙のにじむ思いが胸にこみあげて来ました。
ハム、ソーセージと肉といったものも又良かれでしょうが、昔をしのび、栄養もあるすいとん、寒い冬等、特によいと思います。家庭でも折々に如何がでしょうか。

すいとん作りで思うこと

奥井　勳

すいとんづくり、試写会に参加させていただき、うどん粉練り作業二年目で

す。私の少年時代、戦時中、戦後、食糧難で栄養失調の人々が多く、一パイのすいとんを先を争って食べていた思い出が有ります。麦ぞうすい、豆ガス入り飯は通常食でした。月に一度か二度母が作ってくれた銀メシとメザシのうまさは今も忘れられません。

悲惨な戦争のため、アジアで日本を含め二千三百万人以上の人命が犠牲になり、一パイのすいとんで飢えをしのぎ、戦後の復興に立ち上がった国民に「貧乏人は麦を食え」と放言した日本の大臣さんがおりました。

大切な生命を守る食物を世界中から集めて、見栄で食い、義理で食い、評判で食い、マスコミに踊らせれて食い、半分食いで残飯として捨てるのがあたりまえの今の日本人は異常ではありませんか。五十年前の悲惨な侵略戦争体験を語り継ぐと共に、今私たち日本人は、地球の有限な物資を金の力で侵略しているのではないでしょうか。「自然が私たちの生命、暮らしを育んでくれる」という言葉があります。物を大切にする事も語り継ぐ大切さを感じました。

戦争体験を語り継ぐ集いに寄せて

山野　寛

右議題は今回が六回目だそうですね。関係各位の御努力に先ず敬意を表します。

第５回目まで、反響は如何でしょうか？

戦争という言葉は本当に嫌な言葉です。自国の利害関係に端を発し、一歩も譲らぬ結果があの悲劇を生んだ戦争ですね。

私は昭和七年が徴兵適令年で、現在八十二才四カ月を迎えた老令者です。今のうちに私の戦禍の体験を語り継ぎおく事が私の生存中の使命かと、今六回目に寄稿する決心をしたのですが、拙ない文面と判読しがたい悪筆を憂うものです。

徴兵検査は、七年四月三日実施され、甲種合格で、どうせ兵隊に召されるなら関東軍独立守備隊と選外志願の上申書を提出して奉天配属。私は当時十九才、

中学校卒業後、満鉄奉天鉄道事務所へ就職しておりました。昭和八年六月一日関東軍独立守備隊第四中隊へ入営せよとの令書を受け取り、奉天から第四大隊（連山関）第四中隊（安東市）に入営、初年兵教育を受けたのが、私の兵役の始まりでした。

昭和八年八月二日第四中隊は長泡子（支那地名）へ移動駐屯をせよとの大隊長命令で移動することになり、そこは鉄道沿線から五十里ほど遠隔地の農村の田舎部落でした。大して苛酷でもなかった教育にホットしました。ところが八月十二日午後二時三十分全員出動命令、完全武装、午後三時出発の命令。初年兵の我等はただおろおろするばかり。全員整列点検受け、三時出発。第四中隊は、三小隊に分割されて編成は既に出来ており、私は第一小隊初年兵係の教官でした。六キロ行軍で目的地点に六時前に到着。目的は、この山林の中に敵軍の武器弾薬が多数隠匿してある旨の情報から、くまなく捜索に取り掛れというもの。山林の周囲に見張りの歩哨を置き捜索の結果、小銃八百余丁、小銃弾十

万発、迫撃砲二百有余門、弾薬二万発余りを発見。荷馬車約三十五台を徴発して帰路に向かう途中、我が軍が徴発した山林の裏側で物凄い銃声が鳴り、大隊付き一中隊が敗走する敵軍の挟撃作戦だろうと中隊長見解。我が第三小隊の行動不明。大隊長命令で、四中隊から伝令二名大隊へ派遣せよ。中隊長から三溝上等兵、二等兵から山野、右二名伝令の任務を命ずる。私の実感としては嫌だなと思う。実戦が初めてであり、入隊してわずか二カ月ばかりの我に重大任務を負わした中隊をうらめしく思った。（歩兵操典の中に上官の命令は其の事の如何を問わず肯定。かんはんの所為あるべからず）と銘記あるを思い出し、大隊長命令を中隊長へ、中隊長命令を大隊長へ。地物の利用。時にはクリークへ一時間余りも潜伏しつつ無事任務を果たせた時、我ながら自然と涙がほほを伝った記憶は、今でも忘れ得ぬ終生の思い出であります。其の戦名は東辺道作戦と名づけられ、昭和十年十月勲七等旭日章（金し勲章）と金百七十五円を授け賜うと、軍記の国字印を賜った。私達七年後期兵は九年十二月一日附で帰休除

隊となり、私は奉天駅勤務を命ぜられ、兵役中の給料はそのまま頂戴し、二重の喜びでした。十九才で就職した時の給料は、一日一円七十五銭で、除隊時には一日二円。現在の状況からすればお話しになりませんね。其の後、関東独立守備隊は昭和九年十二月編成替で十八個大隊、其の後二十四個大隊へと編成されたとか。鳴海町にも、十八個大隊に編成された時に軍曹で活躍された杉浦忠義君が、今でも元気で会社社長で頑張っております。

其の後私は、昭和十五年せっ江省徐州市に居を移し、居留民副団長として活躍、昭和十七年一月七日召集、港湾（キャンワン）へ集結の赤紙を受けましたが、そのとき約二万人位の動員だったそうです。編成に三日も掛け、私は上海陸軍特務機関へ配属され、二カ月の特別教育を受けました。目的は中央軍の中へ丸腰で入り平和を説き帰順工作でした。中央軍の上層部との接触が第一と心掛け、当時公然と阿片の吸飲所があり、先ず吸飲所へ入り、中隊長・大隊長の名を知り、「今日は私に接待させて下さい」等、言葉巧みに中隊長以下百八十

名の帰順工作を成功させた事等、思い起こせば我ながら赤面の至りです。私も阿片中毒に落ち入りましたが、特務機関には阿片等ふんだんに貯えて有るので不自由はありませんでした。

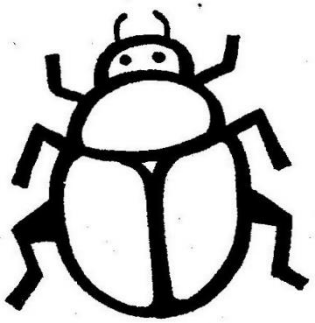
日本敗戦時に、上海の接収に湯奥伯（トウオンパク）将軍が其の任に当り、先ず憲兵隊特務機関、上海領事館等を目標に、中央軍の憲兵が皆ブラックリストを携帯しており、写真入りで出身県、氏名等詳細に記入させていた事には驚きました。私は偽名で変相して帰りましたが、後日、長野県庁からの呼び出しで、「貴殿は戦犯のようで、中国から手配されている事だけは知って置いて、軽率な行動はしない様に。」と注意を受けた。

私は阿片中毒を背負っていた身体でして、村の診療所へ行き、事情説明した処、同情して頂き、「オピアート」と言う1ccの阿片の注射を二十日余り続けて頂き、これ以上は打つ事が出来ませんよと宣言され、その後に東京の慶応病院で手術を受けて、阿片を全く断ち切る事ができ、今日に至っております。

＜付記＞

満鉄とは、南満州鉄道株式会社と言い、大連から新京を連京線、奉天から安東迄を安奉線、奉天から撫順迄を撫順線と呼びました。撫順は石炭の露天掘りで有名でした。

この鉄道の両側、左右十里の間を中国から借用し、日本の権益と定め、関東独立守備隊は、その鉄道の警備及び治安維持の任務に当たりました。但し日本の警察、憲兵隊等総括して領事館もありました。



終戦の思い出

木村　正男

八月の声を聞きました。終戦記念日の十五日が来ると、五十回です。今さらながら、月日の経つのの早いのに驚きます。

八月十五日、いやな記念日、この日を私は三重県津市郊外の山の中で迎えました。ここは六キロ四方位の処に小高い丘が十ケ所位あり、その一つ一つが独立して、海軍、三菱、住友、愛知の四ブロックが、各々に分かれ、丘の中に地下工場を作り、仕事をしていたのです。

私たち下々の者は、毎日、大本営の発表を聞き、上の者の言う通り一生懸命働いて居りました。昭和二十年早々頃は、戦況が悪いなどと余り思わなかったです。ただ、空襲の回数が少し多くなり、三月に入り十二日、十九日、二十五日の大空襲で名古屋が全滅に近い状態を見て、不安になって来ました。

私自身は、昭和十八年初め頃、自営業を止めさせられ、愛知航空発動機部に

徴用工として入社させられました。三十二歳だったです。入社して二カ月後、少しばかり学校へ行ったおかげか、職員に転向する様命ぜられ、技手補という辞令をもらいました。軍隊で云えば、初年兵から少尉に上がった様だとひやかされました。

とにかく月日が経って昭和二十年三月の名古屋大空襲。自分は家も焼かれず、爆弾にも遭わず、空襲の翌日も平日通り鶴舞公園の東から熱田まで、交通機関はゼロなので歩いて通うのですが、道中、見渡すかぎり焼野原、死体は散乱して居り、筆舌では説明出来ません。ただ涙を流して夢中です。今思い出しても体がふるえます。空襲は毎日のようにやられました。

そんな四月早々、私は津の地下工場行きを命ぜられました。終戦を迎えた丘です。行って驚きました。台所で使う磨砂を掘り出す作業所なのです。工場で使う機械のキの字も知らない私が、工場の責任者だなんて合点が参りました。工場は、これから土方作業をして、機械を据えて仕事をする準備なのです。磨

砂は外へ出すと、ご存じの様に、白い粉状になり、誠に弱いものですが、部屋の中では水分を含んで、固さはコンクリートの様です。着任早々で様子が判らないので、津の高茶屋の海軍工廠へ挨拶に行き指示を受けました。その日から私は軍属で、尉官待遇なのだそうです。私の所属する丘は、第八工場というそうです。要するに十ケ所位の丘全部が海軍の所属工場になる訳です。日が経つうちに、名古屋工場から移ってきた熟練工、徴用工、学徒動員生で二百人近くなりました。毎日、前後左右を碁盤の目の様に、二メートル間隔の柱を残して掘り進めて行くのです。この地下工場を久居の地下工場と呼んでいました。それは近鉄の乗降が久居で、地下工場で働いていた人たち全員が、無住居に困り、久居の家庭全部を訪ねて無理に宿泊させていただいたからで、自然久居となじみが深くなった訳です。食事は海軍工廠から届けてくれました。

六月に入って、削り出した磨砂の捨て場所の広さ（白さ）が大きくなったナアと思っているうちに、大阪方面への爆撃帰りのＢ２９が地下工場の丘へも攻

撃を加える様になり、警報サイレンが鳴るようになりました。部屋の中に居れば、一トン爆弾位なら安全という体験を得ました。しかし、外の仕事を無にする訳にはいかないので、各工場毎に防御係を交代で毎日五名程作り、工場の丘の木の枝を折り、磨砂の上にさしこんでカモフラージュする事にしました。しかし空襲の回数は増えるばかりでした。

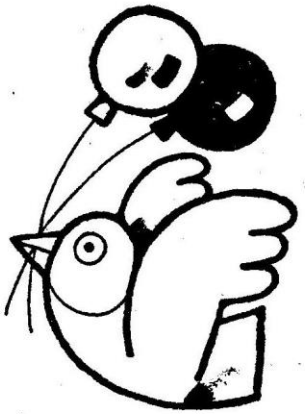
六月九日、名古屋本社行きを指令され、工廠へ許可印を貰いに行きましたが、上司が不在で一日延ばしで山へ帰りましたら、午後熱田本社が大空爆で全滅に近いとのニュースが入りました。そのニュースを聞いた途端、私は説明出来ない気持ちにおそわれました。翌十日、私は早速無理をして熱田へ参りました。会社の正面を入って行くと、爆弾を落とされた大きな穴が出来ていました。二トン爆弾だそうです。とにかく何もかも無茶苦茶だ！変な言い方ですが、或は大変失礼かも知れませんが、死体を見ても恐いと思わなかったです。三日三晩熱田で過ごし、久居へ帰ったら、死人くさいと言われました。少し落ち着いて

から、戦争なんて嫌だナアと内心思うようになりました。

七月二十三日、私共の第八工場入口の少し横に爆弾が落とされ、五人が即死しました。サイレンは鳴らずじまいでした。

八月に入って、広島に変な爆弾が落とされたと、隣室にいた久居聯隊の少尉から聞きました。八月十四日夕方、工廠の方から、明十五日工場前の広場へ集合の事と連絡がありました。八月十五日、皆様御承知の様に、天皇のあのお言葉で無条件降伏が発表されました。あの時の気持ち等は各自色々あるでしょうが、人を殺し合うなんて事は嫌です。

あれから五十年、早いものです。自分ながらよく頑張って来たと思って居ります。残りの生を有効に過ごしたいと思って居ります。



緑区民の戦時体験記録集（第一集）
ー第六回戦争体験を語り継ぐ集い・資料ー

編集責任者：第六回戦争体験を語り継ぐ集い
実行委員会

印刷、発行：名古屋市緑社会教育センター

発行年月日：一九九四年八月七日